

寛永諸家譜

平氏十九冊之内  
支流

内閣文庫	
番號	和 20199
冊數	186( 76)
函號	特 76 1



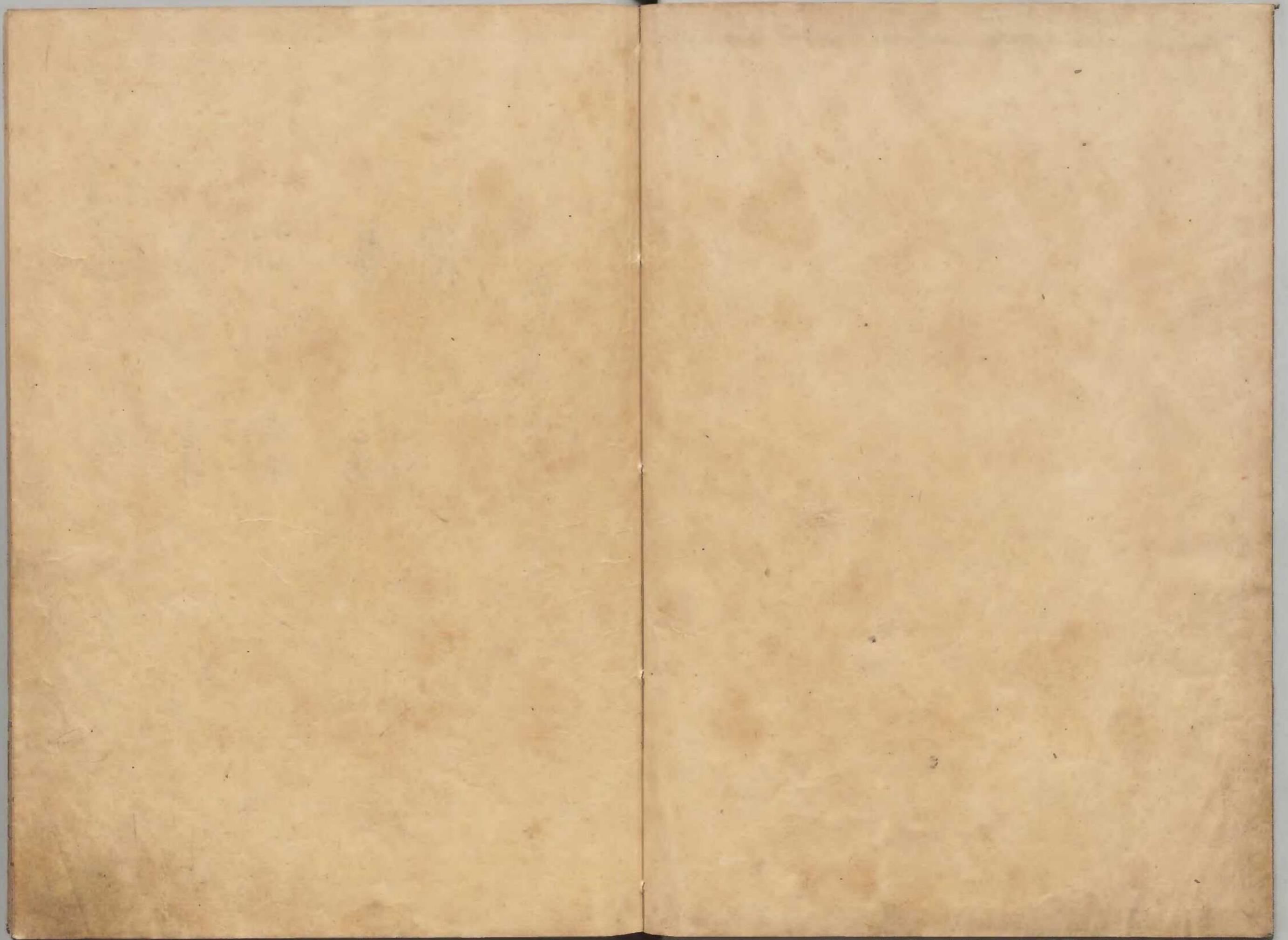
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM Kodak





鳥居

梶

金田

高井

松田

宮城

神田

三浦

猪飼

寛永諸家系圖傳

平氏

支流

鳥居

●  
平氏

鳥居法眼

忠氏

傳内

淺草文庫

父子不和乃事あふりしり三別  
渡り候也

忠茂

忠茂

田幡守

田幡守

忠俊

忠勝

源八郎

三右衛門

忠勝

忠俊

宮内少輔

宮内少輔

忠吉

忠系

兵庫頭

藤左衛門

忠政

忠春

伊賀守

伊賀守

重延しげのぶ

重實しげのつとむ

藤兵衛ふじべゑ

伊賀守いげのまもり

重元しげのね

久安ひさやす

忠次ただつぐ

久八郎ひさやちろう

右守みぎのまもり

又一郎またいちろう

鳥居又兵衛とりいまたべゑ 長が祖ながのそ

系けい 冨下ふした 一いち 見み 元もと

守まもり

忠明ただあき

源七郎げんしちろう

忠者

伊賀守

清廉君

廣忠卿

東照大権現了了法之人

大権現御幼少乃とき忠者勅旨

とて御暇なびり厨料等みえ

と御進も平生忠節とぬきんで志

づく軍功あり傳聞本詳なり

了了法を

法如幹測

忠宗

源七郎

討死をい法進乃我場の家事を

毛子か

元忠

表右衛尉

永祿三年尾形捕挾同合戦此也

元忠お陣も幸列本野原合戦の時

元忠お陣也

元禄三年

大権現伝言と三方原一ひて合

戦乃とき

大権現の軍真統一敗海元忠をせき

戦て矢底をく一ゆゑ元忠が

まゝなるの鞠は前輪一あゝ

別信玄撰を考つる

別信玄撰を考つる系少々あり

信玄幸列伝訪系此城小島を居て

元忠一の城の案内をうのめん

その伝訪系一とてしつ時小城申

一鉄砲をうから元忠股小あゝ

家長根浦坂八郎元忠を考まけて

考りぞく是一りてその底金と

一もなを足れやまひあり

天正三年幸列長藤合戦一忠



是の時城中一画田氏ありて是  
をまゝ是は佐玄は至所なり鉄炮  
をまゝに元忠が兵をうけ元忠馬を  
馳せ城をとりおしき軍勢をた  
づらへてよりそおれ元忠が勇切  
かあり  
元忠後列府中一おしき海濱  
とゆふとき持舟の城より鉄炮と元忠  
が軍中一よりそありとて山城

そのゆへに一旅をくゆりものか一之忠  
水野が十郎松平玄蕃三宅宗右衛門  
少も小甲府一よりそあり番を法とむ  
うろとき小田原より小糸た瀬門に  
内某甲列東郡一よりそあり攻燒  
元忠守ておしき一よりそありおしき  
大瀬門に内某よりゆゆ一むかひ  
里約一よりそあり敵のゆゆ兵三方の  
一をみて元忠水野が十郎松平

三宅宗太夫と相謀く小糸乃  
兵をうらうの軍を遣屋より敵  
の首を新府より集む

大権現の事を聞る軍功で感

ふ甲列郡内を元忠よりなま

且今この海へおまかしら

武勇れいとも不なり

小田原氏直西と野より伝列

後仰

大権現を中石新府に城小入の氏直

と陣一既して和談を和議

と禮せんをゆ伝列泥田に城を

一さづき氏直大道寺氏を

甲列府中より一む真田安房

がいへは泥田に城を我武勇のら

一さづき新府より

大権現に貴命よりいふも

授べしとかなわは

大権現元忠よりび大久保七郎右衛門平定  
針頭中列為根内近藤田氏保科  
弾正なるびり并伊兵衛少輔  
の家臣木俣玄依をて是とせり  
むけ時元忠家臣小原孫助中野左衛門  
大澤竹兵衛曰甚九郎巨海孫七郎木  
新八等亦八人討死  
曰十八年秀吉小原進發時淺槍  
弾正木村常陸女梶原某をて圍

の諸城をせえしむ

大権現元忠よりび本多中書平定より以  
て関東依倉玄氣赤金徳南  
乃諸城をうけしむ  
將定付乃城をかこし浅野弾正長政  
本多中書忠勝を城面よりしむ  
とて平定自計以て新郷小じし  
木村常陸女梶原某は加和氣と致意  
新郷より入隠居出給よりしむ

本城を少くもしてゑりしを  
せし敵兵をせきしめて元忠の家臣  
安友孫四郎寺田玄米小田切又三郎一宮  
次右史馬三十三人討死し夜をくわ  
者七十人なり然も元忠程なきり小  
これと攻城は小糸十郎家長井之  
と兵未降をくわく鳥居は旗  
をくわく兵士は城をせし家事志  
意なりこ乃ゆり城をまのり事

あはれど福づくは城をくわく  
の人一とらあんといひさゆり鳥居  
は旗も元忠なり何小清時弾正  
城をうらんをくわくは城兵の  
云をゆりしは元忠の

大権現(言とせ)心  
大権現は治り弾正く是なり  
あはれしは弾正と元忠はゆり

とるる事ありきしんやとのいふに  
此ゆへに弾正はいつくの城

入

大権現園東八列御領知乃中まき下総  
矢込殿よりしひく下領守るをた

秀次奥列九部より教向のとき

大権現兵と率しと系舎し

元忠信をよ

元忠平生教度軍功あり

大権現御感状をたまはんとす元忠

ていしく我他君より信より

この世に御感状をたまはんとす

はこらん事をおはせし

大権現是を感し

慶長五年上秋京勝上御せ

うわて

大権現御遊野のため園東御下向此時

元忠を少々め城列伏見の城を海  
しむ河小石田治部少輔三城と方小と  
ひく謀叛を殺しこれ流して伏見  
の城をせりし元忠法とめしつらひ  
こまをせむぐ城中の悪黨ひそふ  
送流をひき入八月朔の城中火を  
為城と相志しつら所は郎等殺死  
するものそれ敷をし元忠も討死を  
は河年六十二 法名長源

忠政

新右衛門

長亮

天正十二年長久自合戦の時元忠  
甲列郡内とまはしこの頃小忠政  
信重一強を合敵とらしその首を  
切常名とあらしめし  
慶長七年奥列定城十百石と給  
たり乃らと志野竹貫二万石と

久五郎

元和八年

台德院殿が羽國宮と郡二万石忠政

一丁たより

寛永三年回國室川江底二万石を

くまへしぬる

同年約命と藤り後口位下小叙を

同五年九月廿六十三歳少一丁

率も 法名峯山

添次

久五郎 土伏守

参長六年甲別郡内北城を

より一万余石を

同八年 治りより後五位下小

叙一土伏守一

元和元年五月廿日 播磨大坂を

合戦の時敵兵二十八人より

志し... 亦此武士十八人討死す  
元和二年

台徳院殿乃教命... 後河

大納言忠長... 此之... 命

寛永元年... 甲列府中... 城

... 二万五千人... 領

曰八年六十二歳... 下... 法

林伯

忠勝

た道

忠頼

潜波守 石見守

慶長十一年... 一

台徳院殿... 物... 一

曰十六年正月... 送... 小叙

將軍家より法入りし

忠昌 まこと

伯耆守 はくしよのみ

忠房 まこと

右衛門

淡路守 あそぢのみ

寛永元年

伯耆より法入りし よ 従五位下 か

一叙一淡路守より伯耆

同八年家督を法入

同十四年三十二歳少く死す

法名

宗忠 むねただ

忠春 まこと

内膳正 うちだんせい

寛永十六年より

將軍家より

忠恒子

大京亮まさのり

忠政ただまさの家督いけと法しほぎぎ寛か上かみ二十に二に万ま石し

と

寛永十三年七月七日二十三日

法名鉄山てつざん

忠定たださだ

自勝よせのり

忠恒ただつね題なづ云いくく子こがが子こりりりり忠定

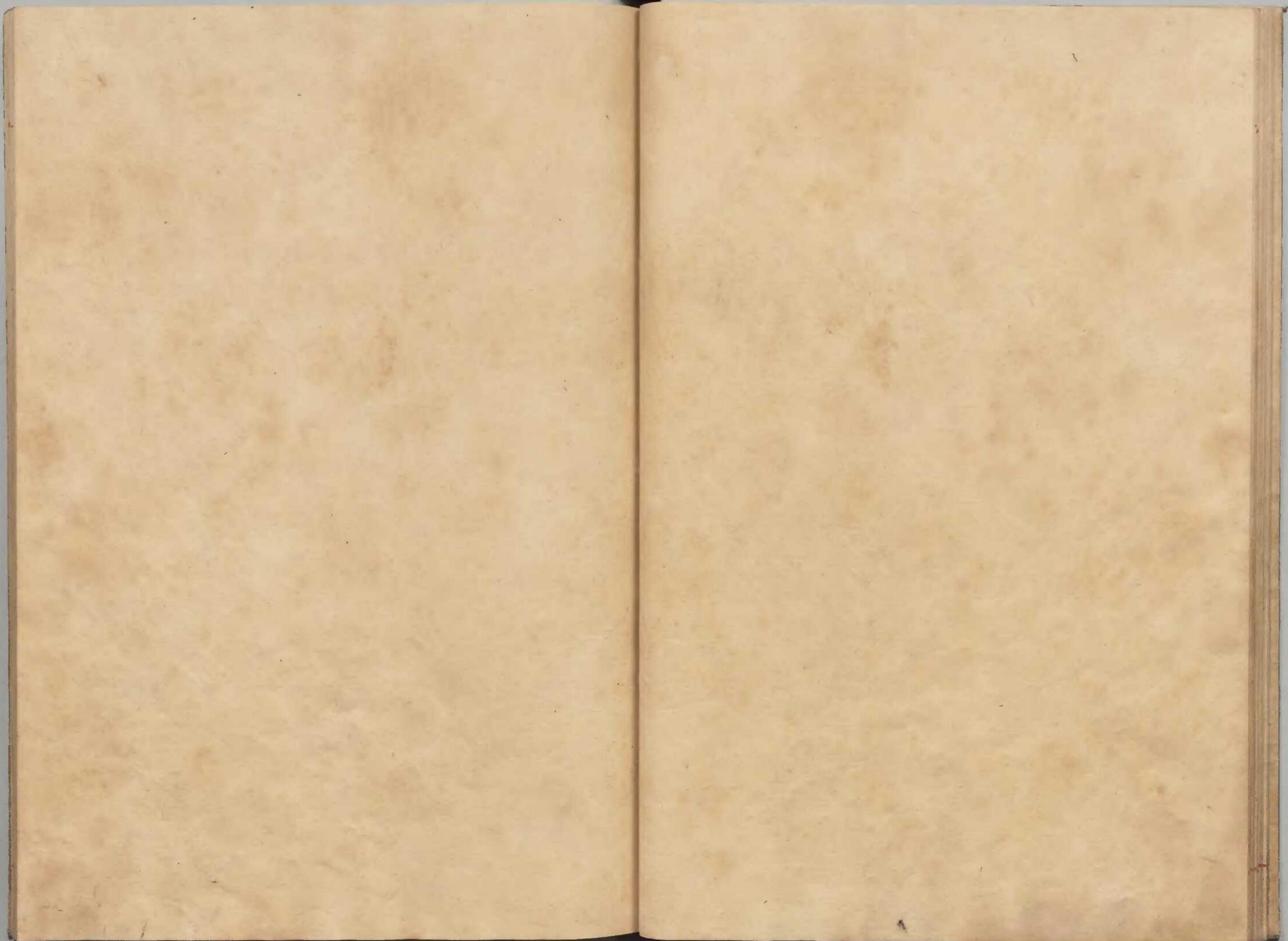
家督いけはは号ごうととりり寛か上かみををああららた

めめくく信しん列れつ言ごん孝こう乃の城じやう三さん万ま石しををししりり

寛永十七年正月しやうげつ從したが五位ご下したりり叙しよす

旗はた乃の紋いづ鳥とり居ゐ

幕まくら比ひ紋いづ竹たけ小こ雀すずめ



鳥居とりい

予の先紀別野氏の松野の松現は松  
野海大長鳥居の重き子孫を忠が  
才法眼を氏が松現は鳥居を才は  
予は予は世も予は鳥居は法眼  
と号を予は予は



孝くまふ系

元龜三年二月原合戦より供養

永祿元年四月十二日家より病死

法名道長

長次

又長次

永祿元年長次十四歳よりして

めしきく

大権現より法人よりまうり河小姓

かひそのら

右徳院殿より法人より言天祿河

陣より供養

長久の陣よりまうり

天正十九年奥河陣より供養

慶長十四年五月十二日家より病死

法名常芳

長なが

又兵部

生國武統なまくにぶつう

元和九年十一月五日めされて

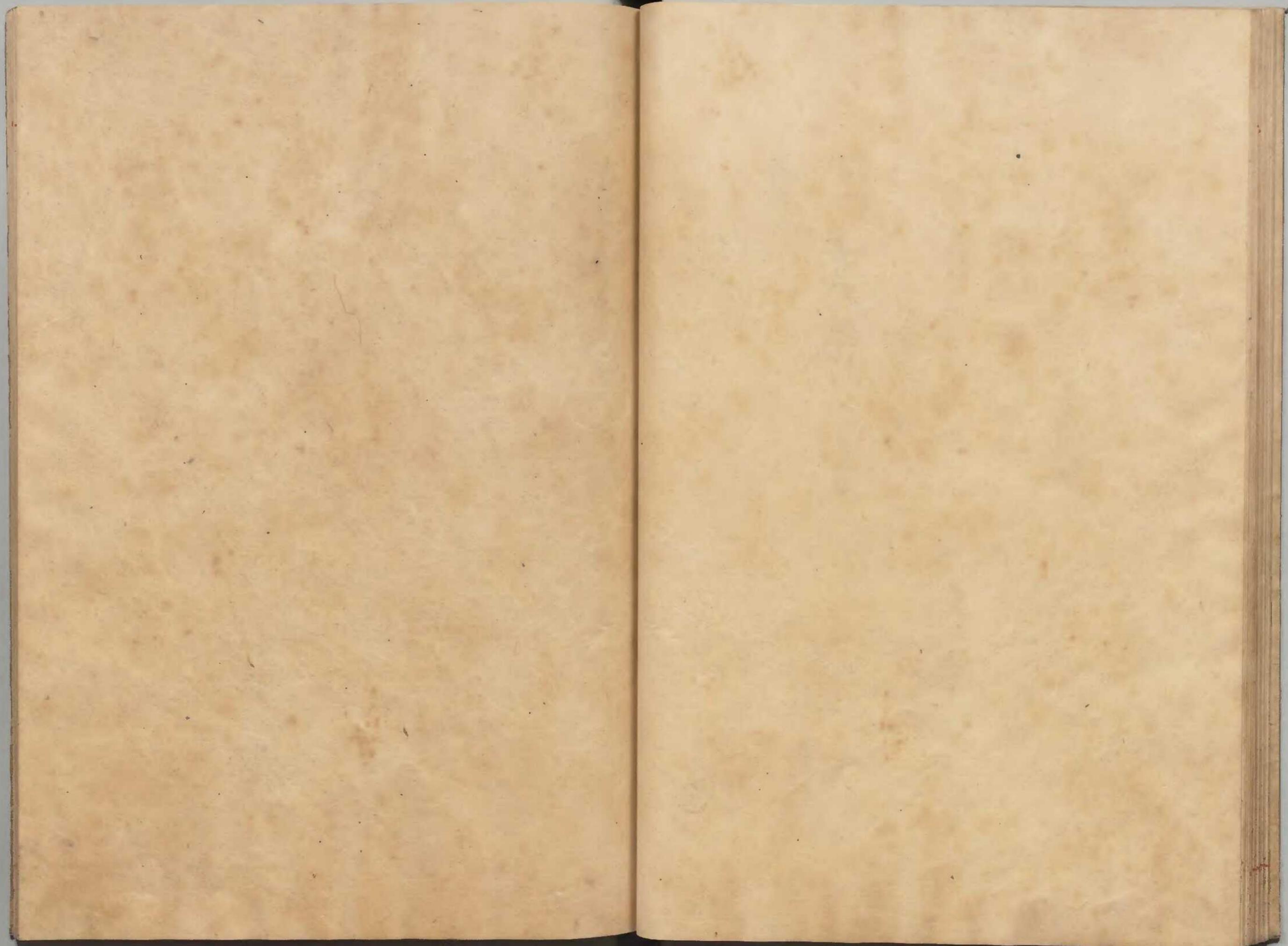
將軍家より流人としてまゝり小

十人組とあり

長なが

家いへ

家乃紋竹小止いへのみぶし  
止とど  
雀すずめ



鳥居

正載

五右衛門 生國三河

廣忠卿ひろたけ 法名道當みちとう

正正

又右衛門 生國同前

何れも凡<sup>ふつ</sup>信<sup>しん</sup>康<sup>こう</sup>より一<sup>いつ</sup>法<sup>はふ</sup>人<sup>にん</sup>をり信<sup>しん</sup>  
大権現<sup>だいこんげん</sup>一<sup>いつ</sup>法<sup>はふ</sup>人<sup>にん</sup>をり信<sup>しん</sup>

元和二年十二月十九日六十八歳小  
一<sup>いつ</sup>死<sup>し</sup>法<sup>はふ</sup>名<sup>な</sup>淨<sup>じやう</sup>慈<sup>じ</sup>

心覚

小兵部<sup>しょうべいぶ</sup>  
實<sup>じつ</sup>を平<sup>へい</sup>井<sup>い</sup>新<sup>しん</sup>三<sup>さん</sup>郎<sup>らう</sup>次<sup>じ</sup>忠<sup>ちゆう</sup>り子<sup>こ</sup>なわ  
守<sup>しゆ</sup>正<sup>せい</sup>の婿<sup>むすめ</sup>となわ家<sup>け</sup>督<sup>とく</sup>を法<sup>はふ</sup>くこの

ゆり鳥<sup>とり</sup>居<sup>い</sup>に縁<sup>ゆかり</sup>も次<sup>じ</sup>忠<sup>ちゆう</sup>も三<sup>さん</sup>列<sup>りつ</sup>人<sup>にん</sup>  
なわ父<sup>ちち</sup>と三<sup>さん</sup>右<sup>みぎ</sup>馬<sup>ま</sup>友<sup>とも</sup>次<sup>じ</sup>らわ 廣<sup>ひろ</sup>忠<sup>ちゆう</sup>卿<sup>きやう</sup>

大権現<sup>だいこんげん</sup>一<sup>いつ</sup>法<sup>はふ</sup>人<sup>にん</sup>をり信<sup>しん</sup>  
三<sup>さん</sup>列<sup>りつ</sup>安<sup>あん</sup>祥<sup>じやう</sup>一<sup>いつ</sup>法<sup>はふ</sup>人<sup>にん</sup>をり信<sup>しん</sup>  
まづこのゆり

大権現<sup>だいこんげん</sup>一<sup>いつ</sup>法<sup>はふ</sup>人<sup>にん</sup>をり信<sup>しん</sup>  
安<sup>あん</sup>祥<sup>じやう</sup>譜<sup>ふ</sup>代<sup>だい</sup>と宣<sup>のたま</sup>ま  
これと祖<sup>おきな</sup>父<sup>ちち</sup>ら先<sup>さき</sup>う世<sup>よ</sup>名<sup>な</sup>氏<sup>し</sup>詳<sup>じやう</sup>を

一ヶ下  
次第

三郎右衛尉

生國後河まろが

寛永七年

右衛門殿を將しんしる

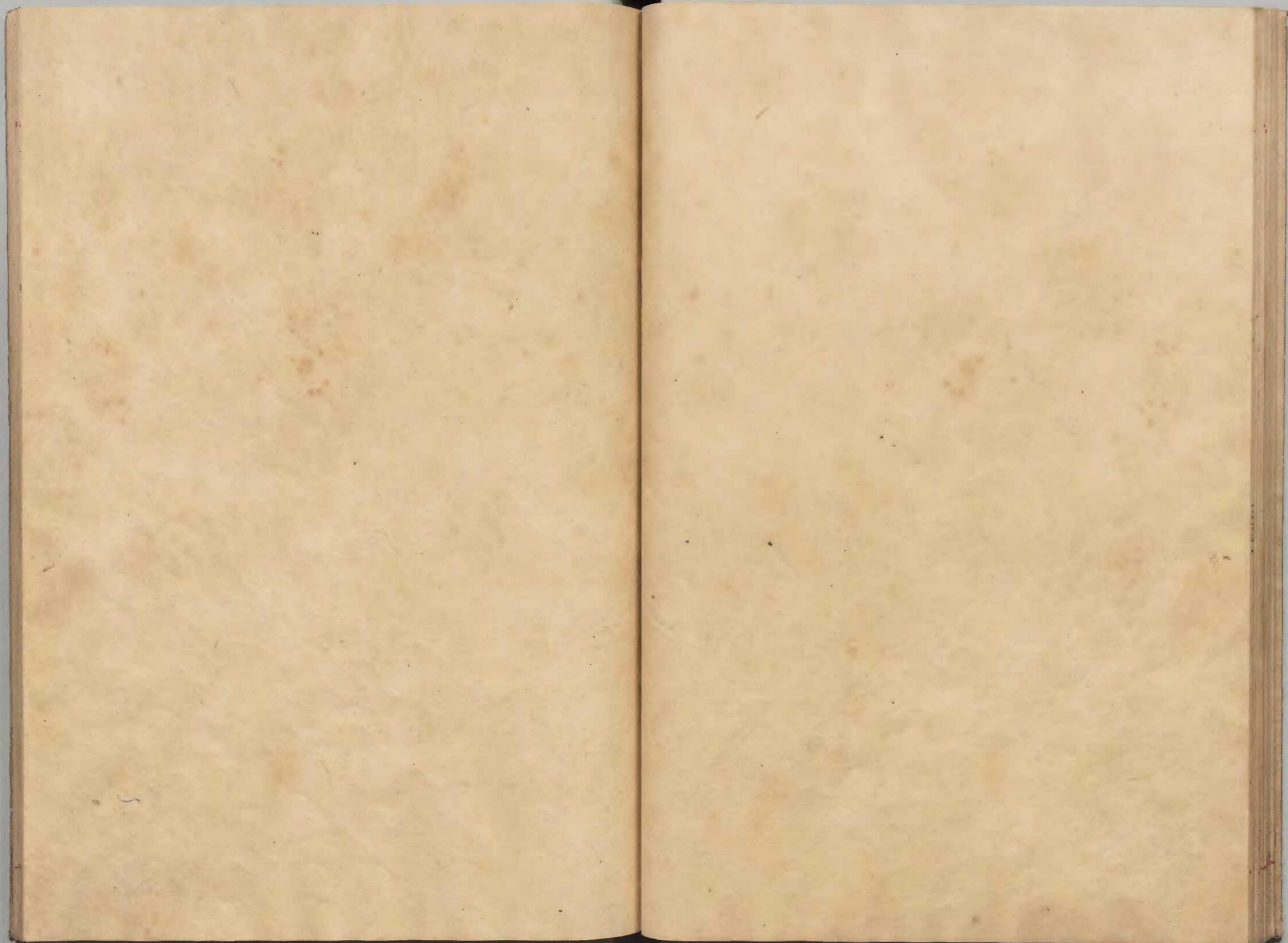
同九年

將軍家しんしる將しん賜たましる

日十八日 殉命しんとりりし小十人

組乃々しんみぎらりとり

家乃致しん九しん内の一し鳥居



某

長十郎

某

梶

長十郎  
ひろしげ  
生必三河  
廣忠卿  
下  
法  
寺  
川  
家

大権現一法人くくまいる

某

光助ら

大権現一法人くくまいる

正道ま

金平ま後次郎の兵衛の名も生まる三河

大権現一法人くくまいる

教め余の一しくく本の中の勢の小の法の人

家の者とまる

安長十九年二月十三日一死す

六十四歳 法名松の琴の淨の白の

孝

生國い伊い珠せ

後の通の若の兵の衛の名も勝の總のが書

勝の總の本の多の兵の衛の名も一しくく

正勝

次郎兵衛尉 生國三河

大権現

白河院殿

將軍家一法之人

寛永十六年七月十六日一死

五十二歳 法名長藏

正重

左郎左衛門 生國伊豫

寛永九年八月十日 實も渡邊善兵衛の子かわ外祖父正道

の養子とある

寛永九年八月十日

將軍家と物

れ番と法心

定治

今年 生國回の

實に 後治権在り子あり外男正勝が  
出子とあり

寛永四年二月

右徳院殿と物とあり

曰六年初に御番と法と

曰九年とあり

將軍家一法とあり

家

次郎兵衛 生心武苑

父の家督を法と

宣徳

二郎兵衛 母氏とあり 梶山 孫

寛永五年九月十日

將軍家とあり

曰六年所切米いそぎとく

曰十二年十一月いそぎ三十一歳少く

某

長者

將軍家いそぎ教令いそぎ一いそぎ一いそぎ家督いそぎとく

家いそぎ乃いそぎ紋いそぎ梶いそぎ葉いそぎ







古時

忠貞為 生國武統

將軍家ノ法ノ

家

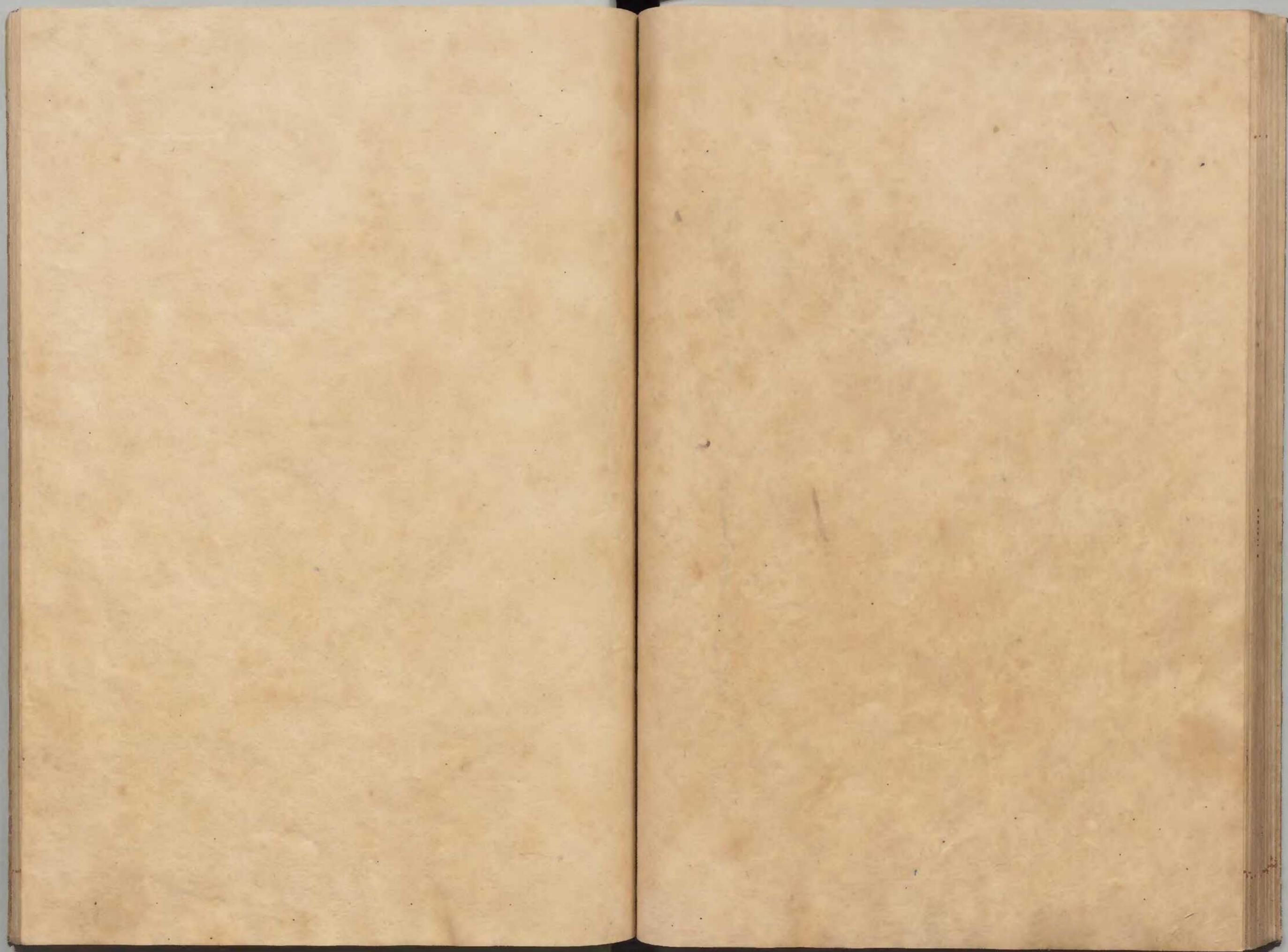
源兵衛

元和九年六月二十日

台徳院殿ノ謂

將軍家ノ法ノ

家ノ致掃遠



言井 いゝ

某 あ

大和守 やまとのしゅ

伊賀國松柱 いがのくにのまつむら

伊賀 いが

直清 なほしみず

作次郎 しやくじらう

生玉伊賀 いゝたま いが

大権現 おほいけんげん

安長三年 始りて伏見此  
城番とほとむ

曰五年開ヶ原御陣乃時伏見此  
城あり

元和二年十月廿一六十二  
〜死

清正

五兵集 生息同あり

右徳院殿 始りて〜

園ヶ原の御陣 一柳監物 倉

大坂御陣乃時書院番乃組

て徳院

寛永元年二月廿一日

死

友清

徳友為 生息同あり

寛永元年

台徳院殿一調しんまうり

同二年しんまうり御番ごばんをしんまうり

家いへにしんまうり紋もん已ま又また丸まるの内うち小こ二に川がわ



小糸氏康ちりやま一法之諱いひな其字とらぬ  
りわく康長と号なづかも

天正十八年秀吉ひでゆき小田原一進發  
のとき足利山中あしひら其城をまゐり城  
没落ぼつらく其とき自教とらぬも 五十四歳

直長ちりやま

市兵衛尉 生母同是

氏直ちりやま一法之諱いひな乃字とらぬ直長ちりやま

と号も父康長ちりやま山申やままう其城をまゐり

自教とらぬ其父の進發しんぱつをまゐり自直ちりやま  
直判ちりやま其諱又今いま一あり

文祿四年ぶんろく一あり

大権現おほいけんげん一法いひなと号なづかも

右衛門殿ゑもんどのをまゐり

將軍家しやうぐん一法いひなと号なづかも

長重

源三郎 生國同花

寛永十三年二月

將軍家より一つ賜たま見み一つ寄ますまり

翌年正月より御事院番を以て

家に致し二筋を遣はす

改業

宮城

とて豊嶋氏なり  
宮城を領する故に

中務

岩付に城を築き  
氏房小いし

天正十七年六月廿三日  
少一九十五 法名永徳

為業

英作守

小糸十郎氏房一法

天正六年五月廿七日一死

五十五 法名惣林

泰業

四郎兵衛

氏房一法之武者大將

天正十九年七月十二日小病

二十六 法名道徳

正重

平右馬

安長十九年

白蓮院殿一法入りてまゝの家

寛永十一年正月五日一法入

少一十法名津雲

正次

五郎右衛門

家の紋菴村内小亀甲

正友

新田

五郎二郎

とま右馬

生必武苑

と板建芳

一法之

軍功

あり

玉状

二通

あり

今

あり



名酒院殿よりび

將軍家より法入るる

正胤

孫六郎 生國同家

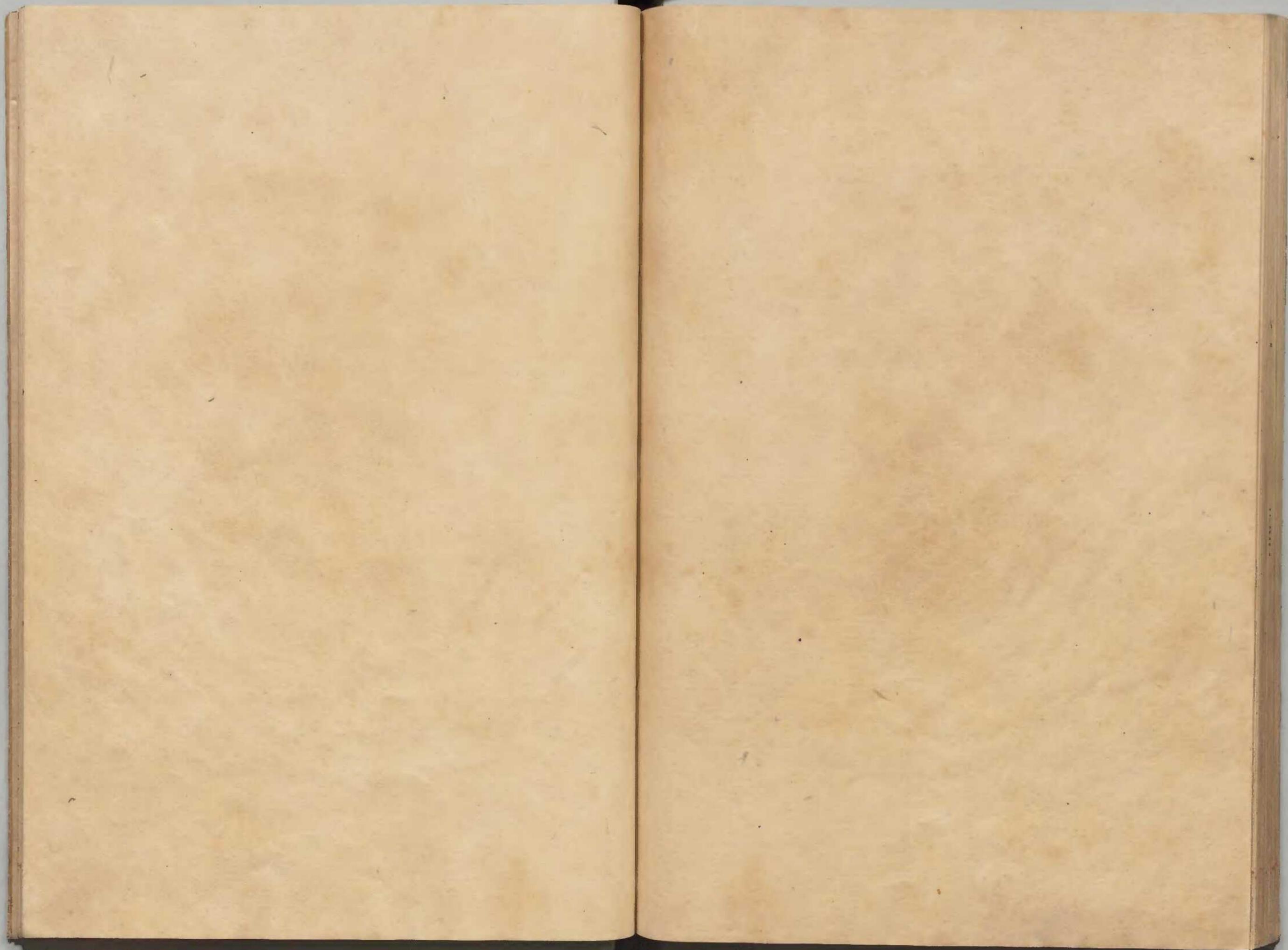
正次

三右衛門 生國同家

元和九年より

將軍家より法入るる

家乃致木此内小菊



三鴻 みしほ

改派 かいは

清在尉

生息之河

長親 ちかちか 直子 なほ 法 ほ 子 こ 守 まも 郎 らう

改火

清在尉

生息之河

信忠のりより一法りよりり

改り友り

清次きよつぐ尉り 生息なま同り花り

清康きよやす君り 廣忠ひろたか卿り 一法りよりり

之列この西にし野の小ことりひりくり尾お張はり前まへとり御ご合あり

我われのりとりきり極ごく者しやとりひりくり疾はやしとりゆり

六十むそ四し歳さい中ちゆう一いつ下げ病びやう死し 法はふ名な蓮れん入り

改り源り

清次きよつぐ尉り 生息なま同り花り

大指おほさし現げん一いつ法はふよりり

元龜げんき三さん年ねん十じゅう二に月げつ廿にじゅう二に日にち三さん方かた原はら所しよ

陣ぢん一いつ法はふよりり一いつ法はふのり敷しき一いつ法はふよりり

なるり乃りら

右みぎ法はふ院いん殿でん一いつ法はふよりり七しち十じゅう四し歳さい

少すく下げ病びやう死し 法はふ名な相さう中ちゆう

改春

清和元年

生園同前

大権現より御湯を

孝長十二年より

台徳院殿より法久寺へ移り

元和三年より

將軍家より法久寺へ移り

改春

弘長

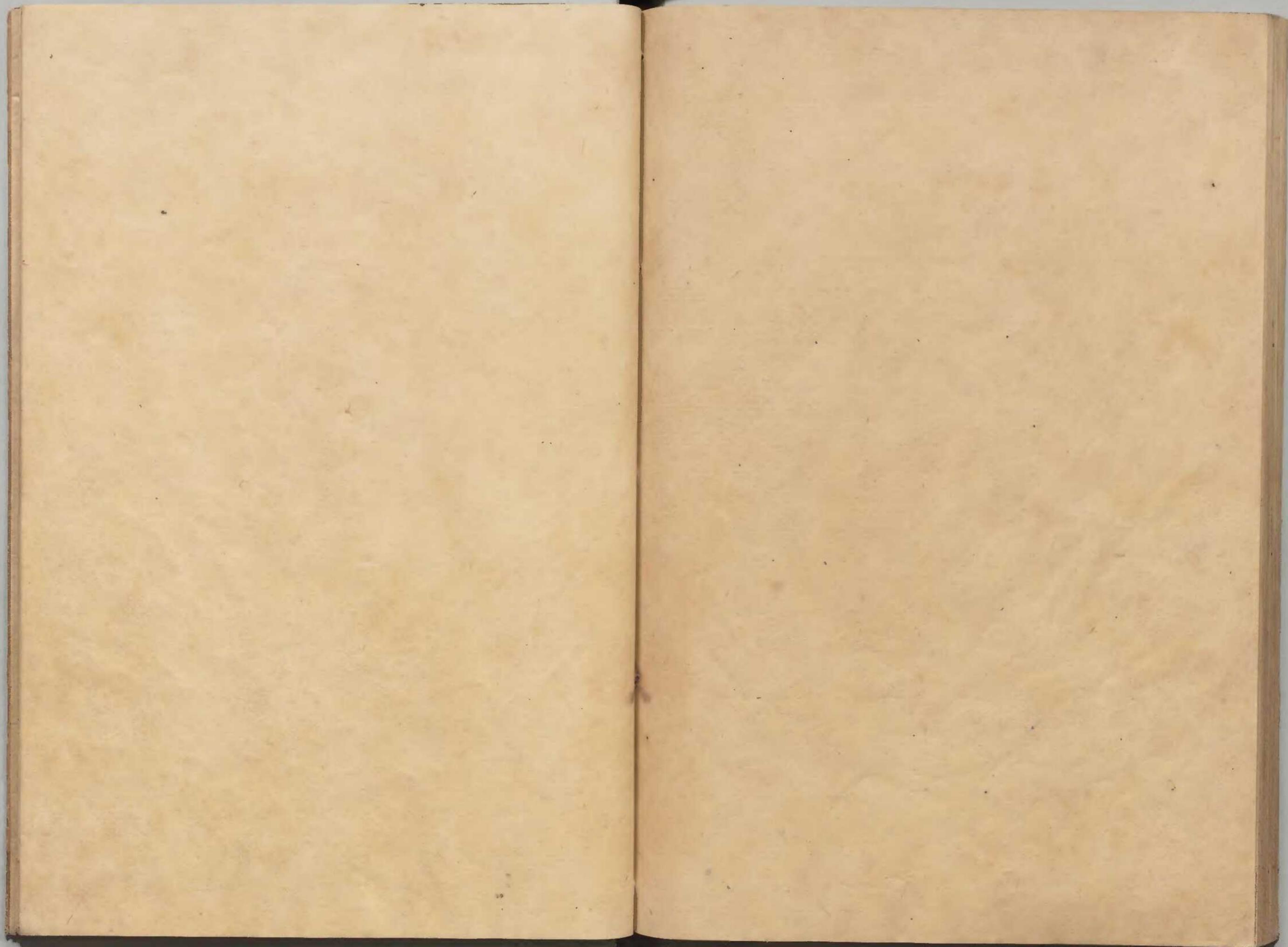
生園寺

寛永十一年二月十八日

將軍家より御湯を

同十七年より所書院番の細小入

家の致下迄の九三日月



正光 あき

猪飼 いの

正勝 あき

孫十郎 生國江別 かみ  
義晴 よしはる 法名次貞 しげ

基助 生國同前

信長ノブナガ → 法名ノボナガ 証録シヨク

光治ミツナガ

右部ウヂベ 右馬ウヂウマ 生國ナマクニ 同前

天正十四年テンシヨウシヨウ 幸列サキリツ 淡松フキマツ 小コ 寺テラ へ

大権現オホケンゲン → 謂イハレ → 寺テラ へ

又マタ 禄元ロクゲン 年トシ 名ナ 議ギ 屋ヤ 陣ジン → 供奉クフエ

至マデ 此ココ

右ミダマ 德院トクイン 殿ノ → 法ホウ 名ミナ 宗ソウ 清セイ

公利キョウリ

小左コサダマ 为ナリ 生國ナマクニ 同前

天正十七年テンシシチヨウシチ 淡松フキマツ → 寺テラ へ

大権現オホケンゲン → 謂イハレ → 寺テラ へ

陣ジン → 供奉クフエ

文祿四年ブンロクヨシ 四十二歳シジュウニサイ 少シヤウ 寺テラ へ





家乃紋釘抜

